

(岡本 記)

満席のバスから「数馬の湯温泉センター」バス停で降りたのは、独り自分だけである。今日(令和4年10月2日)の数馬探訪の目的は、「数馬の一夜」を書いた田部重治が檜原村を訪れる度に泊まった数馬の山崎屋旅館(既に廃業)と兜造りの民家を見聞することである。

檜原村役場に電話で問い合わせたが、担当者は山崎屋の存在を知らなかった。他方、ネットで調べてみると、昔の遠景写真が載っていたが所在場所の説明はない。遠景写真の風景は浅間尾根の御林山から下山した際にみたような記憶が臆げにあることや、田部の書物から山崎屋が浅間尾根からの下山口からそんなに遠くないところで南秋川に面していること等から判断して数馬の湯辺りではないかと推察した。情報収集するためバス停前にある温泉センターに寄り、受付の人に山崎屋の話を切り出したところ、庭先まで出て「あそこです」と指差して教えて頂いた。指差した先は、檜原街道を挟んで斜め向かいの高台にある大きな民家である。ネットの写真は多分ここ温泉センター付近から望遠で撮ったものである。



温泉センター前の信号を渡り、南秋川に架かる「下河原橋」からセメント舗装の登り坂を15m程上った先にその民家はある。庇のついた玄関屋根の下に、長さ2m巾40cm程の板に黄色で「山崎屋旅館」と書いた標札が懸かっている。街道側に面した長い廊下で洗濯物を乾している婦人が居られたので挨拶を述べ「旅館名が掛けてあるんですね。何時ごろまで営業されていたのですか」と問いかけると、丁寧な口調で「いろいろ事情がありまして10年以上前に廃めたのですよ」と応えられた。庭先の鉄柵には布団が掛けてあり、トヨタの小型車が駐車している。嘗て旅館を営んだ広大な二階建ては、生活臭の溢れる民家の佇まいである。オートバイが石垣下の街道をひっきりなしに疾駆する。その騒音で掻き消されているが、夜間静寂が戻れば、潺湲(せんかん)たる瀬音が耳に届くはずだ。色々と尋ねてみたい気もしたが、穏やかな「日常」を乱してはほけれないと思い、旅館名と家屋の外観の写真を撮らして貰って失礼した。



山崎屋から150m程先の道路脇に「浅間尾根登山口」の道標が二軒の民家の庭先を分けるように立っている。2016年11月浅間尾根の御林山に山行した際、ここに下山し、温泉センターに立ち寄ったことがあるので、山崎屋の石垣の下を通っていたのだ。

更に少し上の「数馬上」信号に行くと、信号枝の南秋川側に「蛇の湯温泉たから荘」がある。その建物は立派な兜造りで茅葺の屋根は苔むしている。兜造りとは、合掌造りの妻側を切って採光を良くし、養蚕に敵するように工夫した建物である。妻側の切口に二段以上の茅の庇がついているので兜に似たようになる。一階は住居、二階は物置、三階は柱がなくて蚕専用、四階はサスベリという三角形の屋根裏で蚕の部屋に使う。二階以上は天井が低いのだが、四階建てである。茅庇の間に切られた障子窓が白く浮かんだように見えて美しい。兜造りは甲斐の方から伝わった古い建築様式なのだが、最近では茅の手当てが難しく建て替えの際に兜の上にトタンを掛けることが多い。茅葺の完全な形の兜造りは珍しくなり、文化財級の扱いになってきている。

たから荘から少し上がった先の山側に「古民家の宿『山城』」がある。街道沿いに「延元元年(1336)数馬発端家、南北朝を今に伝える」の看板と「九頭龍神社」と染め抜いた幟が掲げられている。セメント舗装の道を30m程緩やかに上ると、豪壮な旧家が現れる。代々九頭龍神社の神官をつとめる中村家の屋敷である。九頭龍神社の境内には社務所を置かず、この屋敷が社務所を兼



ね、また民宿もしている。敷地入口に「皇太子浩宮様御立寄り記念樹昭和54年4月14日」の樺杭が立っており、屋敷は「文化庁登録有形文化財」に指定されている。先祖は中村数馬と言い、広大な山地主で「数馬の殿様」と言われた。その数馬が集落名になった。

中村家から約1キロ街道を進むと山側に、小ぶりで瀟洒な九頭龍神社の社殿がある。鳥居の両側に老杉の亭々たる大木が社殿を護るように立っている。瑞垣の石柱のひとつに「旅館山崎屋山崎操」があった。

檜原街道は神社の直ぐ先でY字に分岐している。左のバス道の九頭龍橋でなく、右の狭い新太平橋に入る。橋の袂に立ち並ぶ15体の石仏などを右に観て、少し行くと三頭山荘、次いで曲り角の正面に「兜家旅館」の兜造りの屋根が現れる。4階建てで屋根は茅草の豪壮な建物である。左右の石の門柱には「兜屋」「岡部」と刻んだ表札が嵌め込まれている。檜原村最奥にあたる太平集落は全て岡部姓だという。

時刻は既に午後、戻りにかかる。往路で割愛した、「数馬上」信号近くの数馬分校(廃校)に立ち寄る。数馬上信号傍に案内板が立っており、「旧数馬分校宝積寺、明治7年宝積寺の住職ダルクと和尚が子供たちに読み書きを教えた。昭和41年教員1名、児童71名。平成11年3月閉校、その時児童は7名」とある。案内板より細流に沿って200m程上がった先に墓域がある(寺は廃寺で無くなった)。墓の側に傾斜地を均した敷地に二階建て木造校舎(白塗り)と校庭を備えた、田舎の学校らしい学校(標高686m)がある。80才を過ぎた管理人に校舎の中を案内してもらった。宝積寺が廃寺になり、その後に集落の人々の寄付で建てられたが、平成11年に生徒が7名に減少、更に翌年翌々年には新入生が見込めず、已むなく3月末で檜原小学校の数馬分校は廃校になったという。分校は廃校時のままに保存された。廃校になった年の3月の月間予定が書かれた黒板が消されることなく教員室に残っていた。教室の机、椅子の並びもそのまま、各種の教材も保存されており、子供がいつ戻ってきてても授業が始められるようになっていいる。今にもカンカンと始業の鐘が鳴り、子供がバヤバヤと廊下を走ってくるような錯覚に囚われそうだ。管理人は耳が遠くて質問しづらかったが、久しぶりの客人を離さないとしてもいうように元気に、時に詳しくすぎるほど丁寧に説明して頂いた。すまないと言う思いで分校を後にした。

温泉センターで遅い昼食(カシューうどん820円)をとり、バスで本宿まで戻った。本宿探訪の際に休館であった村立図書館に寄ったが、残念ながら意図した資料は入手できなかった。弘沢の滝の入口から満員のバスに乗った時には既に夕暮れの気配であった。天気にも恵まれた「数馬の一日」を満喫した。

(了)